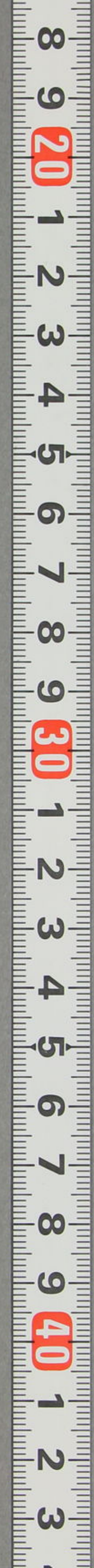


مجلد اول  
تاریخ ہندوستان  
جزء اول

5  
4462  
3





門へ 5  
藤 4462  
巻 3



くつろぎ  
後々の事ハりて海を心の味こそとハ山里ハ万葉おそ  
梅の花  
お免は咲きとつふ心のそくに於て海を此れお免の山里を  
万葉の述ふハ汁れはよハ平句の位あり先師もお免  
冬を合ふものと知るハ一と云はるよりハ何の俳書も傳へ  
題乃中より里出る事ハさうなまこと一出て大極あり是  
際れ云ふお免の物言三れとの平句のおとを位あ  
るものおとくにかく云ふハ何れも位をえ知るハ一とあり  
又いづくをとり合はるに白れぬるハやま規規有と何

昭和九年  
十月一日  
購



王一討も傍るし門人へよにん坊へ言詞あり

又いそく人の方よめに教句を年抄あり何れ誦向季  
の三至合障りなれり考へし句作りはれはし一季句  
出するハある所よりしりしはしとてし

とこれ松の何れを年業且に用事年抄といふ  
と孝のし侍れハ師のいそく達人のわさあはれ端は不  
及とて去今年妻孝のし業とてしあすも孝にんをふ  
と来へしとて師のいそくもれうらに抄とあさりてはるる  
城宜とのと句ふあつくとまならやと侍るこ古ととて人侍  
やかと侍りたりのふあひるやうに説出れし

も尔系ぬれ教句はるりやホ乃云結するハつ初めは  
説て小そのおのひ抄する當りハ一代二之句ハ過分の事成へし  
たり當りハ至て詞強かりそ老まのひもさたわく次ぬつじ  
書根のまゆねとけまたりといふも至てはるるいひをれし事  
その害に盡して清瀬川此写りある水のあつ流といひはて  
あつねと歌をこ説ともいへば亦紙やといひ捨るもあり也  
といふへまを説といひてととさるる事とも古あるといはれ  
皆句作の亦あるしと師の教也

師のいそく下句上句とて二字之字はる小阿里まると此二  
三字にまぬり落る句阿里骨折へまよ



師のいそぐ拵てある詞とふらりてた人の名おとよある  
こと

師のいそぐ素秋のゆせぬ方先よまじきるに習ひふし時よある  
日いそぐ花より時付ぬるいあめりもふらりたるは夜のこと  
日いそぐ能諧ハ教てあるは亦何りよく通るにあり或人の  
ふらりて通きれた袖とかきてるやうにして海をゆめり  
師のいそぐ或人の句ハ艶をいそぐとまきに依て句艶よわらば  
と艶よふらり何れも又或人の句ハあほりなりあほりんまら  
およそ何れなり又或人乃句と作よてんの世を考  
ふら他はうら詞乃作好へうはと

又いそぐ拵ハ句らりて何れもことおとよにふらひなり  
と付隠士のお城は隠士と出まねり夜よまてせん候あり  
今一がけ後の強士はてて何やまらと必しやむ所よわら  
おむハ門人すも作若あま附合と老吃のちよらひ  
とと或他よあま  
句れもこのはのこかたるあもわらて人の勝を志する  
もの好まざるによりて言下にもらうとすか  
と本よと門人の志といく二三句かとつ本流てふは  
本



宛そもいふ此つ人と初とて志城いふ事ある一ノ号城笈  
の小文とせん又小文と斗やと云は号と或方而て能え侍る  
みち刀とつふは誰よけりあま宜集の名と思ひ侍る之書  
号によれしとものなりと考に足堂一ノ拙号はわさ清くはれ  
万よんを以有ゆ之 原ある能諧の時言やとつふ句に月夜  
師一を城月よとて一とて秋を付物一八月と云月次城  
出せり月秋の堪取よよひやと出合を以はるそゆ一と此物  
あつりと能去りま

牡丹は芍薬と付るゆいある師一をさ心の好取よと差合よ  
いあつ付らるゝ傷あつ付る粉も師一とて一と師乃詞一  
万よ此れある一ノ門人らめてまへ事一

師のいづく相似する句ハ集にも時外は重くはさるりく  
せらるり一後猿蓑は師此若葉の花の句猿籠る若葉の花  
一亦よつとと重侍ると之 付句此ら好いりく一しは師  
時りあつと流く付心の形とつあとなりてえと一と  
さゆ一とと流せと又侍るま一とゆもはま  
又猿蓑に招三を三休は侍りて師一重なり心付て見る  
一とと身ハぬれ紙のとり亦たこといふ句と云出侍れハ師の口  
を一休形よと侍る之休格ハ定加一とて勤るは物あり  
又琴之味縁のれ句ぬらひて世上あつひとつり心んよ句



一々又よしい後く句他りともなれし時もの道はさむ  
若の勤る亦かくのゆもわるといふし

或二子他語は志不ありて并他二之志老翁は点張る  
師是といけ次再之の後その人は對していよく皆其他之  
志れども我おしふ亦非を志めやうんとせば是彼の内は  
二三有り句と捨れし抑や其侍人とこその人將心ひやま  
ましと終まを原の門み入とかなる

師の白句を天下の人よかたるゆはやせし一人二人す  
か多ゆるすかす一人乃いめなれゆに侍ふはなりよかん  
とたらしの詞なり

師のいよく他語おしふ亦志終出の猶半るやうにめやも  
其れは初に道をそとこふ亦わりとていへば其をそとととも  
志のともおしふは後句をなれなれにのち二位はさく位は  
兼て自生と猶いと振さしる詞ありん末并れ述べて了を  
おるそにせんすをあまりに甘てらよとめてはくしそのこと  
師の白其角は白席に連るに一座の無よる句をひひ出て令  
ゆとて感も師を一座そのゆりぬしはよ人乃いする句も  
あるゆも有とてさあしきゆと云く座よりて一座の人  
よとれらるをそあゆふや其門人者よらぬし一を角は  
生質とてそに於しとて







或月次の座にてまゝを門人示す所あり  
 師のつく他譜を以て他譜を甲一人ありひとくも  
 のう小も道と云ふ事あるやまらもあつて  
 そのあつたふせよ他譜なりとさるる事あり  
 譜とてまゝを以て此事をたのむとて

師乃神楽堂と云句を難するもの有師のつく他譜ハ平話  
 と用ひつに神楽堂といひあつて侍れハまゝ事ハ知  
 此とて其後けりをまづつて一人あり師の白唯一の神楽堂  
 ハ神楽殿と云ハ神楽堂といふもつていひ今も  
 益ありた、他譜ハ神楽殿がつかれと或他もあり

季小て燕の句をつつむと燕の句小て季の句をばくむとむ  
 つてハ娘へも今ハつてつかれと  
 師のへとく絶京にむく内ハつてあつてあつて  
 をと又あつてあつてつてつてつてつてつてつてつて  
 故もあつてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 季小てあつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 師乃いとく他譜ハ益ハ俗語を正しつてつてつてつて  
 其つてつてつてつてつてつてつてつてつてつて  
 師のいとく流ハ此處をてつてつてつてつてつてつて  
 之句ハつてつてつてつてつてつてつてつてつて



中一のふと中一のふと一侍るとなり

師のいづく撰集懐命短尺才也ふへ一才やうハさく下  
中一はハ一かぬふをひありたりと一猿との能筆さし  
ふか大之佐若此名大まとい中一く又く侍ると

能虫の物かふる小ハ奇の詞手承ふと遠くふり必あり  
ゆ一さにかあへりしかあふれつさ時の拍子又さあ又  
くさ一きふ才遠へふるゆあ一と

師はに我をわかれんをひあると之或方ゆく半人師を  
座上は諸侍せりゆくゆきまんと師の白け不似合の西也  
若若くは序も付れハんさふらふに能借此後よ味侍る

のるんまにと形かこむのふと又ある振りの時門人三三  
子伴ひ出れ一雨難波のさう一これありなるあつて  
雨の薦よ才をちりて入りゆくこととその後けやとハか。  
加地地中てハ乞合め押の身を忘れてぬこととを  
かるに價を人のいふとくに毎もぬ一侍ると  
師ある方又審まりて倉の後蟻窟とやふ一とりの  
衆の更事申服よとてせりさことかくあつて申ふ  
それ自身の能借つていふとくいのちも又かんのと  
とて能者の能借亡師のいふと  
あると一此縁ありの記さこ一米のよ一あつて



をとこひて父母とまじりて師のいふはのりたる所あり  
 死て後見付くハ是とて又阿利れ西て又亦もあふへて  
 感心なる初見見されどもあされぬへて  
 師一とせ岐阜持何又の時持尉一人は十二冊宛亦平篇  
 して其ひりよりこれとせふ十二冊の纏て横冊とせり  
 信く此むつりていふをいふやましく是をなす持尉ははる成  
 房は侍れハ是よりぬれぬよりさへきてたうまよりぬれぬ  
 を又さうくむつりていふられりていふひとまふとけさへん  
 とより方ハ此ハある所とせり  
 阿人のゆをいひておのれはいふ道よとせりれもな付侍る

ちんまへへていふ事かててもあふへてた世情はあま  
 人情をせり水ハ人あ細まてて宜友あてハたりのこと  
 又いそく人は非なる多し今其地あるへては病あ  
 る三人の方にも好かとい老後うまふ乃さりまもあてん  
 え侍らるあり  
 一とせ大和の法隆寺に太子此開帳をその次太子乃冠えお  
 ちり侍るて後の開帳は又整水一之あたる古代のりれを  
 ちまうけそ振立水一師のちのかとせひやへへ  
 ある禅僧討のゆをまうつりていふは師の口詩のゆハ後  
 士志量とらふりのけさりぬたぬたぬのあて人も名を忘れ



多しかきつひは又云詠ハ隱者ヲ待風雅也云と云  
 原のいふく定赤々みそ此秘方にとぬ人を入らつゝの説あり  
 この秘といふハまゝ難なる秘方をやしる所をいふは撰者  
 の身とてまゝいふる所も却て秘かきまゝいふるべき  
 難ある所も撰いふことこの如きを秘といふはつゝの秘を  
 し先こと師といふべきなり

伊勢のふれこしを色て花の鏡となる水とあるは五文字  
 なくとも下と上と重みてあつてつへるとは五文字年々く  
 水はくまみて水の色もつゝも花のつゝりかゝるを  
 いへるは五文字終骨のふれつゝと師のいふこと



渡川たぐまふらうとてた懐雨もくかて人にわづ清めや  
 このふれこしつゝハむらつゝの字何れとつゝ字二説あり  
 理ハ何れとせんぞ人はあそびてさつゝとさしはも定家  
 の云何れと義理を結てたつゝのいハヤ一絶とてかてハた  
 水のつゝにいとんとあひてつゝのつゝとつゝと亡師も義理と  
 清ハ年々といふおりつゝなり

古今此序にふ人のうははま錢かめく難くちやうや  
 貫之のまかせるは師のつゝく難くちやうやのつゝ  
 終骨乃西と足彩一書一たる亦く春撰法師の鏡の雲  
 乃ち我爲とのふれつゝ人ハつゝとあるはつゝなり







ふふとたつてはれにき人のいそくも古も今も  
 人よ及ぶに金白をせらるるもとらるるう一原のそめり  
 いまの後萩草にあはれ萩よ似るあまそ別之かせは  
 角細く乾草一巻之糸を結親娘は萩と名付れり  
 伊セの海まるとれ海石見の海東國の名ふれりも名ふれり  
 糸をかきていづるあのかみ

春のふれりやとねくともまもぬらつともはるる三月とふ  
 二月末より用るる三月二月よりあまの雨とふ月と  
 五月雨と云晴るる花やうに云ふのく六月夕立七月雨  
 八月雨と云晴るる花やうに云ふのく六月夕立七月雨  
 八月雨と云晴るる花やうに云ふのく六月夕立七月雨

いひあるるあまの三月四月五月六月七月八月の月

東風春風と東風雨と虫文有友は南風秋は西風冬  
 冬は北風夏は南風秋は東風春は西風  
 そのうちあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
 花も花といひいひいひいひいひいひいひいひいひいひ  
 中秋あひあひあひあひあひあひあひあひあひあひあひ  
 冬にきては春はあひあひあひあひあひあひあひあひあひ

春は五月よふと秋は十月よふと  
 秋は十月よふと春は五月よふと  
 秋は十月よふと春は五月よふと  
 秋は十月よふと春は五月よふと



あつ初くも昼より後はあるやうにと連歌さ

帆の家入達の筆入も夜にむし一紙の筆跡よりさしひく

きと帆らふ今より一紙跡よりさしひくを運と云今其筆

入き道人誌も此方順送にもに反なり感ありし師

の云へ 舟舟ぬかさぬる字をにとりむく編をえに云

難波とたつぬとさしひく筆跡とらむと云

ふ乃終ハ心のけいささといふの約史<sup>ヨルヒ</sup>のきささといふ

りなかりふ乃終ハふ夏の心くささかやるふくはさるあまを

くささ心の終をも不変れくく又さささくくささささ

さささ 藤は藤やかしのささささささささささささささ

つ子き田う畑う植物う結ひてさささ

田舎の水きり里らうくつ子よささささ

船の月いす七日より廿八日まで

魚よる春されハ船よさささささささささ

らにあくにとりふつ子とささささ又ささささささ

氷の岩指ははらふさささささささささ

さささの云いふさささのさささささささささ

た喜れふさささささささささささ

跡る後あさささささささささささ

しつさささささささささささささ







自の彩と上の句下れ句小節の連にさしこも月又  
月小節日そのささふを云々俣物より此彩をさ  
つる俣物なくして云々又一人さしこも俣也まや  
流をもつと連去あり

昨のいよく大方のまよは何のなりぬらんたりにおくは  
淡よりけいこの略立はは務りまの西白く

あるひハ昨宗通ふとの方へ句はあしを彩小時まで出せ  
法ありたえハ一吹ぬりし時去籍とさうかふ三句まで自費  
とさふ方と口はさへハ懐紙はまゆある今ハ別紙はまて  
宗近の方まで添削のえりまを括まてハそのま括はたてハ

少はあしけり

大妻の喧花仕り後の方  
淡の風大あきさを吹ぬて

宜し引盡しを彩

葉風

芭蕉先生

コ云く  
燕介

何氏蘭風

何

人の方へ句を送るに折紙に遊技



半端下旅立送る

何

手号丹日

芭蕉粘

拜机 合凡

なぐりて手号丹による

或ハ半端公老翁人子依て手号丹

人子よりて半支あくるも半

半函も粘を送りたるも半

紙四ツ折一、折三先の名氏号と半

付紙と送る付紙は赤きと用也

牌又青紙と用也

介包ハ紙袋と用也畧一之上包也

名成送り付折紙送振

山岸氏

又何氏何右の辰

宜為車来作

宜為何彦作

手号丹日

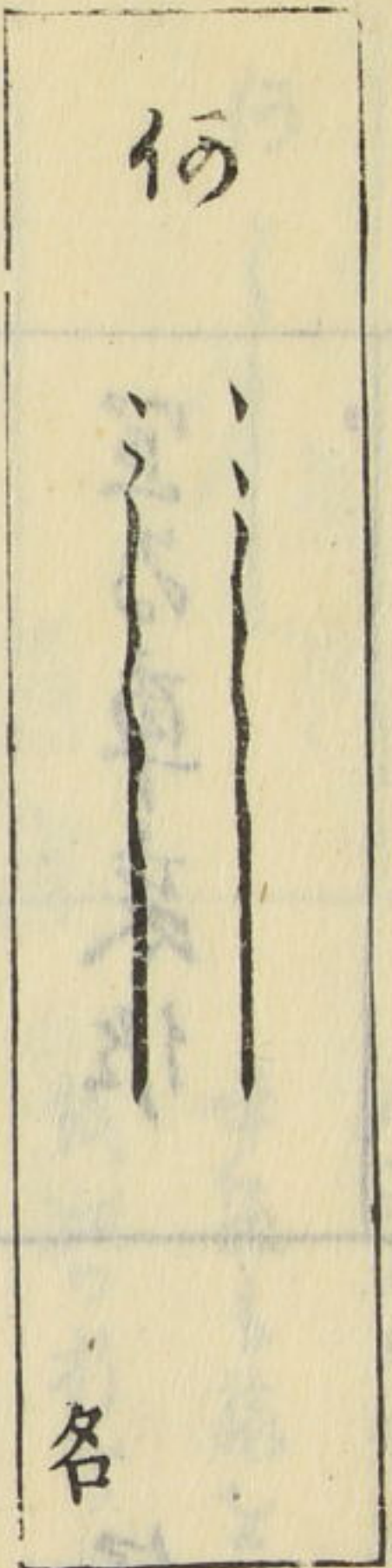
芭蕉判

自分 名判



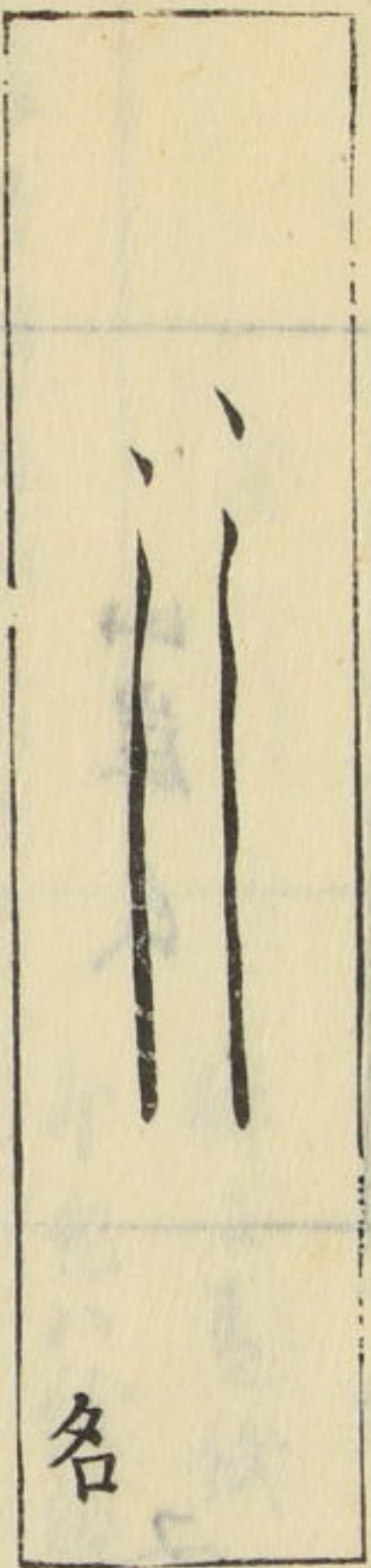
色紙短冊乃り

紙の上下のしりぞきハまを雲の方上之  
裱の肘を以て雲上とく

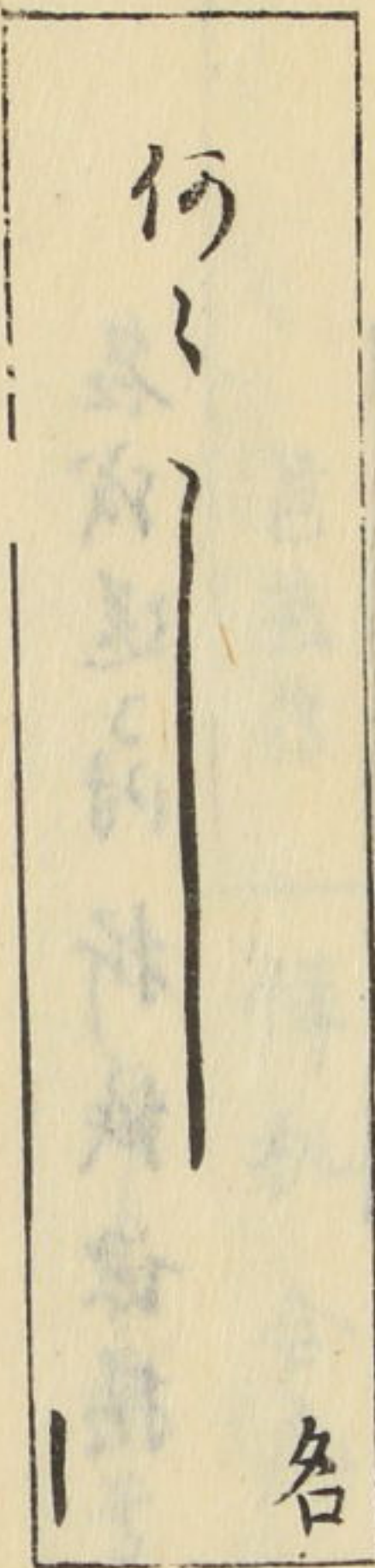


名

名、揃へ表ル卑下之

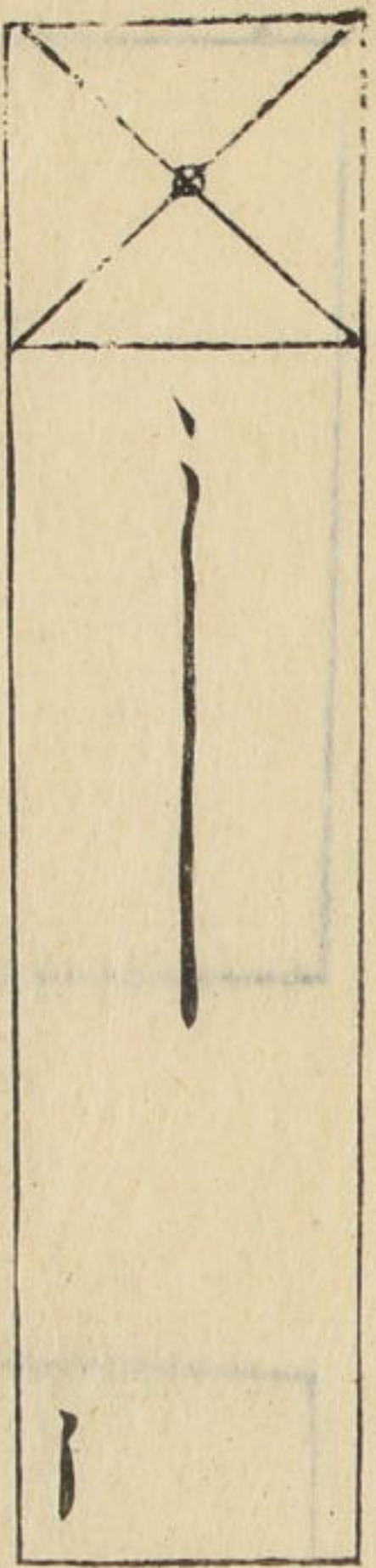


名

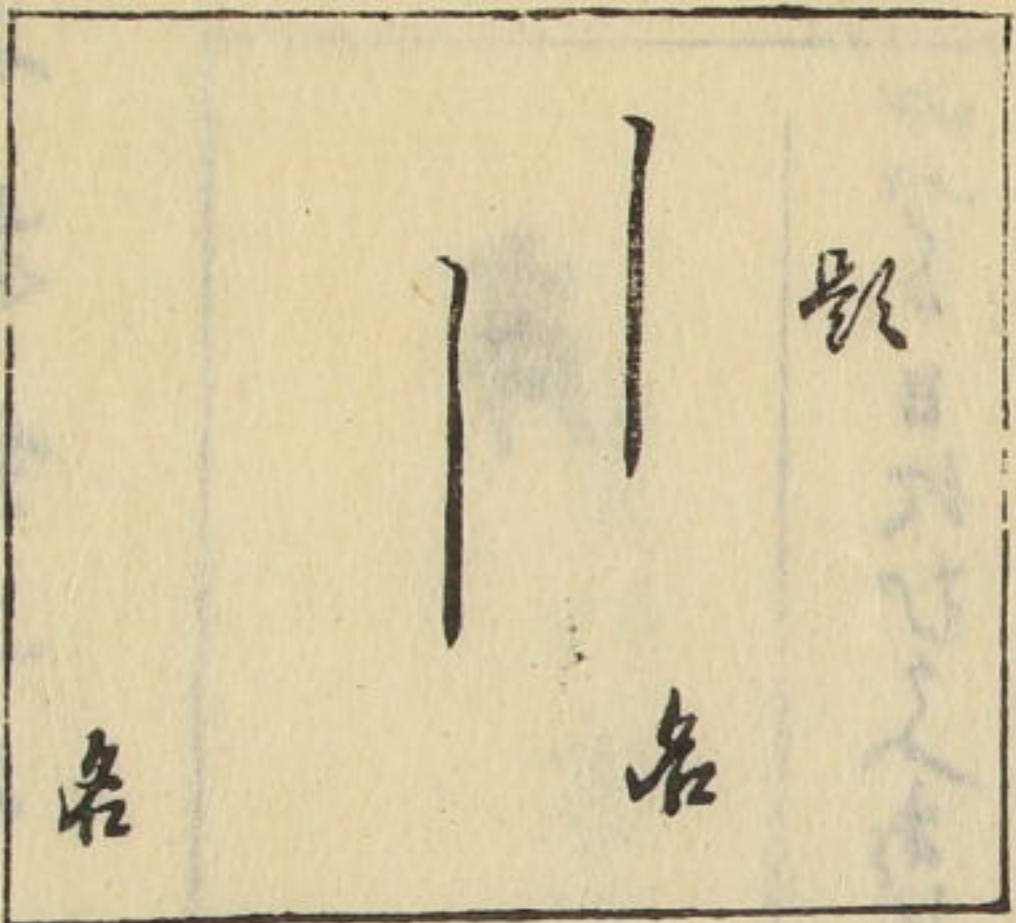


名

云か一下下出紙を去時之  
紙の字を対ハ一字半上テ  
去紙あるとも下下は対ハ  
一字も上とく



花の短冊まかお又付る時を水引西て付る一筋之付るは引  
き一色ひとくよきて一むまひ一して付るこ  
ろ引宛紙のえん四角にまをま中に字を付る是れとく



字又長はるハ八分也



名の手振はるの通若唐号と  
まつる時と  
菘虫庵服部土芳  
唐主ともまとく  
菘虫軒 胎ア土子  
胎ア氏ともま一とたり



奇抄紙二行七字

之行三宇

霽

いつる日にむくあはしの  
岩とくはく時海里と  
切く岩のそ

紙の折ぎ  
つひの料紙  
のこ

飛ろは乃つけつ  
みのやふさくけみ  
王もぬくまさめ  
そく

享和元辛酉春再刻

鷺門書林

大坂心齋橋筋

本示良屋長兵衛

京寺町押小路上

搦屋治兵衛 合

井筒屋庄兵衛 棹

同三条寺町西入

菊舎太兵衛



